

農協はどこへ行く ——私的な感想——

斎藤 たきち

私が農協運動から足を洗って、早や五年近くになる。「ひとりが万人のために、万人がひとりのために」を運動の原点に活動する農協にこそ、私たち日本農民が生きる明日があると信じいのちを燃やした私にとって、過ぎし日々は充足感よりむなしさが胸をつきあげる。農協への訣別への思いは今、農協への期待と信頼の回復は解体と再生による新しい農協の誕生にあるといえようか。その新しい農協とは今日の農協組織の生き残りをかけた大型農協ではない、かつて敗戦後に湧きあがるように村々にできた小さくとも、熱気に支えられた農民のための農協なのだ。

今日、農協をめぐる論議の主流は何といっても合併をめぐるあれこれであり、その流れが激しく加速しているのはわが山形でも同じである。それが、組合員たる農民の明日、とりわけ直接生産にかかわっている組合員の生活と未来に根ざしたものではなく、組織と役職員の生き残りをかけた延命策としか私には見えない。農協がJAと名称を変更し、装いも新たに出発したかに見えるが、内実は全然変わっていないばかりかむしろ協同思想の風化への軌道修正が感じられる。このごろの農協職員は商社マンか公務員であるかのような態度だ、というのが大方の組合員の実感でもあるのだから。

私の加入しているY農協は、かつて17の単協が合併してつくった総合農協で、来年度で30周年を迎えるが、組合員7千、職員370余名をかかえる県下一の大型農協として君臨してきた。盛時の事業実績は販売額は100億円、貯金700億円に達する優良農協であったが、近年事業の成績にも陰りが見えはじめ、今年度決算では何とか黒字になったものの、内容をよく見ると不動産の処分で帳尻を合わ

せ、それで赤字をカモフラージュしているようだ。

かつて、共済と金融を両輪にして笑いの止まらなかった経営も、バブルがはじけた余波を受け、ガタがきているのはどこの農協も同じなのである。その繕いの方法を、農協の大型合併に求めているのが今日の真の姿だといっている。赤字経営の対策として、イの一番にメスが入るのは営農部門で、その切捨て、あるいは下請化が行われる。私の農協の場合、支所ごとにあった営農部を廃止し、5～6の地区を統合して営農センターを発足させた。このことによってキメ細やかでいていねいな指導がなくなったばかりか、営農だよりや肥料、農薬、資材等の配達が日本通運に委託され、営農部門における組合員と職員との直接的なコミュニケーションやふれあいは希薄化してしまった。しかも日祭日の休業にプラスしての残業なし、また土曜休日の拡大によって事業所の窓口カーテンが下される日が年ごとに増え、農協もいまや官公庁並になった、と組合員の多くはぼやいているのである。

労働時間の短縮は世界的な流れであり、働く者の権利であることを否定するものではないが、それを金科玉条のように主張する職員意識は何を言わんやであろう。職員には、農協とは何ぞやの認識も、農で食えなくなって他産業へ転職した組合員のことも、二種兼業の中で生活を支える今日の状況のこともほとんど見えないようである。こうして、いわゆる背広を着た職員の増加によって、農協は組合員に根ざす組織から、ひとり歩きの組織へ大きく変貌する岐路を今歩みはじめていると私には思えてならない。

そして、コメの部分開放と食糧管理制度の改革という嵐の前に立って、組織の生き残りとその道を模索しているのが今日の姿でもある。それは組合員の生活と未来に寄り添って生きるか、それとも協同組合の思想と原則の

放棄または空洞化による政府の農業対策部門の受け皿としての組織か、という二者択一が迫られていることでもあるが、今の歩みは確実に後者なのである。

山形県下 62 ある農協が、6～7 の農協へ合併統合する案が議題にのぼって久しい。この計画にそって、すでに、「みどり農協」(酒田市)、「おきたま農協」(川西町)が誕生した。その他も農協の生き残りをかけて論議が詰められてはいるが、それぞれに抱える内部事情や利害の対立があってスムーズには進んでいないのが現況でもある。

農協が合併しなければ生き残れない、という現実、とりも直さず、組合員の減少と生活基盤の変化にあるのは言をまたない。いま日本の農は、まさに風前の灯だというのは私見ではなく共通した認識でもあるはずだ。

かつて農業経営や技術の上で県下でも名をあげた私の村は、今組合員 500 余の中で専業農家は 20 戸にも満たない。満たないばかりか後継者で最も若い人はすでに 40 歳をこえているのである。

農業収入で生活を支えるには、大型機械による省力化、農薬の大量散布による見た目にかっこがよい製品(くだもの、野菜)が求められる。いわば市場で高値で買上げられるからだ。

こうした流れに棹さし、個の力と責任でどこまで生きられるか、というのが今の私の課題である。農民であることから百姓になって生きてみよう、ということだ。それは農協への絶望からの出発でもあった。

消費者との顔の見える関係、食べものは人間のいのちだとする安全性、そしておいしさを柱とする百姓としての生き方でもある。自給自足を根に、100 種以上の作物を栽培する。それはお金をもうける、というよりライフスタイルとしての生き方でもあるかもしれない。

生まれてこのかた 60 年近くを農業ひとすじに生きて今ある姿に私は、充足感と喜びとを実感しているこの頃なのである。

(山形農民懇話会事務局)